

「ぶんこ」派遣と岩国基地をめぐる現状

五月一〇日、沖繩から、自衛隊が辺野古の事前調査に導入されるらしい」という知らせが、翌日「掃海母艦『ぶんこ』が横須賀から出港したらしい」という情報が入った。なぜ、横須賀には同型の掃海母艦『うらが』がいるのに、わざわざ呉所屬の「ぶんこ」が出たのか。何よりも被爆地ヒロシマの隣にある呉から「国民」に銃口を突きつける為、自衛隊が派遣されたことに大きな怒りを覚え、ピースリンク広島・呉・岩国として五月一六日に海上自衛隊地方総監部、五月二四日に広島防衛施設局に、抗議とともに「ぶんこ」が派遣されるに至る経緯を問い合わせる申し入れを行った。しかし、いずれも責任の所在を棚上げして回答を得る事はできなかった。そこで現在、質問趣意書を準備している。

岩国においては、六月定例市議会が始まっている。三月定例市議会でも否決された「二〇〇七年度一般会計予算案」が審議されるが、今回も否決される事態になれば、市長選になる可能性もある。五月一七日には厚木からの空母艦載機部隊の移駐を前提としたマスタープランが出された。一九九七年に騒音や墜落の危険軽減の目的で始まった「沖合移設事業」の用途が明らかに変更されていることから環境アセスメントを再度行うことを県に求めて行く事が急務である。六月八日には「愛宕山開発事業」を中止するという山口県の場合に岩国市長が同意した。山口県は、中止した後、土地を国に買い取つてもらい、米軍住宅を建設する可能性を示唆している。これに対し、地元住民が反対の声をあげている。

また、広島防衛施設局が岩国で行った住民説明会で用いた騒音モニター図の根拠となる飛行回数に「まやかし」があることがわかった。そこで、質問主意書を提出したが、誠意ある回答とは言えず、現在再質問趣意書を準備している。その回答の中で「標準飛行ルート」以外にも飛ぶ可能性を国が認めた。これに伴い広島県西部側への被害が国が現在予想しているものより大きくなることは明白となった。そこで、広島県西部住民の会が昨年末に市議会が容認決議をってしまった大竹の市民にそのことを知らせる為の集会を六月一六日に行つた。

(大月純子/ピースリンク広島・呉・岩国)

広島・呉・岩国

定

千歳

東千歳駐屯地基地開放日報告

五月一七日第7師団創隊五二年周年(東千歳駐屯地創立五三年周年)記念行事という、毎年この時期に開催される基地開放日に、情報収集・基地調査を兼ねてカメラを抱えて行ってきた。

この基地開放には、祝賀会、軍事パレード(観閲行進)、模擬戦と、戦車試乗、装備品の展示、東千歳駐屯地及び第7師団エリアの市町村の地域物産展などが毎年開催される。第7師団は全国で唯一の機甲師団(戦車師団)で、九〇式戦車を主力戦力としている。その他、東千歳駐屯地内には、北方方面直轄部隊の忍者部隊といわれる第1電子隊、第1高射特科団、東千歳通信所(象のオリ)が存在する。

イラク派遣以後の動きを見ると、都市型(市街地)戦闘訓練などが盛んに行われてきている。その為に、北海道大演習場北千歳地区には、対ゲリラ、テロリスト対応訓練施設(建物)が創られ、防弾チョッキなどで完全武装した自衛隊員の訓練が行われている。さながらアフガンや、イラクで米軍が行っている戦闘を、自衛隊の訓練の一つに加えている。

今回の基地開放で、その様子を伺い知ることが出来るかもと思つて、出かけたのである。実は、昨年(去年)の第1特科団や、ミサイル連隊を主要とする北千歳駐屯地の基地開放では、模擬演習の中で、迷彩服姿の一团が登場した。ヘルメットに防弾チョッキを付け、小機関銃を手に持って、遠くから一列縦隊行進してくる姿は、普段自衛隊を見慣れていても、異様な光景、不気味な集団に見えた。その時は、ふた手に別れての、撃ち型の披露であった。この様な演習は初めて見た。この模擬演習で、はっきりとしてきたのは、米ソ冷戦時代によく行われていたところの、北海道が敵に上陸され、自衛隊が戦車で迎え撃つという、演習ではもつとすでに無くなつて来ているというところだ。その事を頭に描いたら、今年の東千歳における模擬演習では、五つほどの建物(車両にヘリヤを貼り付け、建物に見立てたもの)が現れ、そこに武装組織が潜入したとの展開から始まった。この武装組織に、空からヘリコプターが射撃、バイクや装甲車に載つた偵察隊が先行し、その後九〇式戦車が、建物を取り囲み、ヘリコプターから、レインジャー部隊が降り、その後、武装組織と戦闘、武装集団を壊滅させるというストーリーが、展開された。その後、例年のように赤、白に分かれた、戦車部隊どうしが砲撃をするという模擬演習を披露した。この、都市型・市街地戦を、模擬戦といえども観衆の前で披露したのは、全国で、千歳が初めてのことである。

中央即応集団・中央即応連隊という新組織が創隊される中で、テロやゲリラの攻撃に対応した、演習が日常的に各部隊で繰り返されている。まさに、日米軍事一体化体制が強化され、今までの仮想敵国は、仮想敵集団と変わり、自衛隊の海外展開、海外派兵進出前夜と映る。常に何が行われているのか? 日常的な、監視行動を強めていく必要がある、あるだろう。(谷上 隆/米軍問題を考える会)

点

「米軍再編」の焦点の現場からの声を聞く

四月、岩国の市議の田村順玄さんも講師の一人として招いたシンポジウムと、五月、沖縄のへり基地反対協の安次富さんを招いての集会を行った。

どちらも、「米軍再編」の焦点になっていく現場からの生々しく、緊張をした報告だった。岩国の情報はなかなか名古屋には届かないので、田村さんの報告に「そんなひどいことが行われているのか！」という怒りの感想が多くあった。また、特に、安次富さんは、反対運動の要である命を守る会の金城祐二さんが亡くなられて、その告別式の日ということもあり、私たちも安次富さんの心中を察すると心底心が痛んだ。この原稿を書いている今日も、辺野古では作業を止めるための必死の実力行動が行われている。掃海母艦「ぶんど」を派遣という威嚇を行い、違法な事前調査を強行しようとする姿は醜い。

名古屋では、これまで沖縄の問題を取り組んできた九団体が緩やかなネットワークを作り、連続学習会や防衛施設庁支局への申し入れ、街頭情宣、署名などを取り組み始めている。前記の安次富さんを招いての集会もその一環で行った。

五月の辺野古での集会で、平良夏芽さんは、「全員が辺野古に来るのではなく、この基地建設を強行しようとしている政府に対する行動も必要だ」という趣旨の発言をされた。

今国会で「米軍再編推進法」が成立した。岩国で起こっている国・県挙げてのイジメ・嫌がらせが、基地を抱えるどこでも起こりうるという状況になってしまった。署名や街宣など私たちの行っているのは「反対運動」ではないかもしれないが、基地・軍隊が人殺しのためのものであり、沖縄の米軍基地がイラクに繋がっているのと同じく、この小牧基地の滑走路もイラクの空に繋がり、殺戮の手助けをしているのだということに銘じ活動を続けて行きたい。

(山本 みはぎ/不戦へのネットワーク)

観

名古屋

測

「集団自決」検定に県内全市町村で意見書

前半の空梅雨を取り戻すかの様な雨続きの中、サンニン(月桃)が花盛りだ。沖縄ではアジサイが珍しく、本部半島の個人庭園が開放されてアジサイツアーも組まれている。

国境の島、与那国の民間港に米海軍掃海艇が 親善の為に入港を予定している。住民たちが会を発足させ町長に申し入れる一方で本島在住有志たちも港湾管理者である県に対し寄港を拒否するよう求めた。「軍隊との親善交流はありえない」と言う。地位協定第五条を盾にとる外務省に押されて受け入れに傾いた外間町長も反対を表明している。県民の隣人愛だけ求める米軍と自治体の権能を無視する政府に対して、県は自肅要請で済ましてはならないだろう。

陸自情報保全隊がイラク派遣に反対する運動の情報を収集していたことに加えて海自による辺野古事前調査への動員についても行われたようだ。「新基地建設止めたい有志」は防衛相宛てに、共産党や平和市民連絡会は那覇駐屯地を訪れて監視活動の即時中止を求めた。積極的に辺野古をサポートしている沖縄弁護士会も「表現の自由に萎縮効果を及ぼし個人のプライバシーを侵害する違憲・違法なもの」と抗議した。三月の海上阻止行動でも海上保安庁職員が威圧的にカメラを向けていたことが思い違い出された。

文科省が来年度から使用する高校歴史教科書の沖縄戦記述の中で、「日本軍に『集団自決』を強いられた」との表現に、「追いつめられて『集団自決』した」への修正意見をつけている。これに対して県内四一全市町村議会が六月定例会が終わる頃には意見書採択が揃うと見られる。六月九日には県庁前で三五〇名の県民集会が開かれ検定意見の撤回を求めた。東村の中学三年生たちは平和学集会と基本的人権である請願権を学んだことで、村議会に請願書を提出した。「戦争中の事実を隠さず皆に語り続けていくべきだ」と

述べている。政府が自衛隊に誇りを持たせようとする試みが却って暗い過去を浮かび上げさせているようだ。

(野口裕子/沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック)

沖縄